

に孫達は二男は土建業、三男は私の近所に家を建てて勤め人として家庭を築いています。これからの人生は、地域のために尽くしたり、家庭を見守ったり亡くなった戦友たちの冥福を祈ったりの日々であります。

歩兵第一二〇連隊

中支戦線幾山越えて

岐阜県 大門 久太郎

大正十（一九二一）年四月二十四日、古城郡旧細江村の農家に生まれ、学校を卒業後は名古屋へ行き、南区の岡村工業という軍需工場に勤めていました。昭和十六（一九四一）年徴集兵の検査がありました。第二乙種となりましたが、現役兵より少し遅れて、昭和十七年四月十日 教育召集を受け鯖江の連隊に入隊し、機関銃隊で自動砲の教育を受けました。文字通りの三カ月間で教育が終了して召集解除となり家に帰ることが出来ました。営門を出る前、また召集されるぞ、と言われ

ていました。

まさにその言葉通り、今度は臨時召集令状を受けました。七月、今度は京都府の福知山の歩兵第一二〇連隊留守隊に召集でした。佐世保で貨物船に乗船しましたが、話に聞いた船倉の蚕棚状の居住区に全員入れられ、体を十分伸ばすことの出来ない輸送船です。上海で揚子江を遡り、漢口に上陸したのは、たしか七月下旬の暑い日でした。「雀が熱い屋根から焼鳥になって落ちてくる」という、嘘のような本当の話を実感したのはこの時でした。

部隊は嵐第六二一二部隊で、揚子江下流の安慶にあり第二大隊第二機関銃中隊に配属され、九二式重機銃の教育を約三カ月受けました。四人搬送での訓練は厳しいものでした。関西の人が多く、私は名古屋で勤めていましたし、飛驒の出身でしたから、内務班での教育も厳しいものでした。私は銃手なので、教育中は実弾射撃も自分でやりました。

その後、作戦、討伐、警備などの勤務をしていますが、昭和十八年十一月に大きな作戦が始まりました。

た。我々下部の兵隊には細かいことは分かりませんが、我が連隊（和爾大佐）は出動し戦闘に参加しました。

私にとつては大きな作戦としては初陣でした。この作戦は常德作戦といって、我々の和爾部隊は十一月下旬から前進を開始したのでした。十八日には敵を撃退し、敵陣地を占領、追撃し、大きな河を渡河退却中の敵を、分解搬送で前線へ出た我々が重機関銃などで攻撃して戦果を挙げました。

問題の常德への間の行軍と戦闘は厳しいものがありました。城壁の前には河があり、夜間、胸まで水に漬かりながら機関銃を運び、銃身や脚を頭の上にして進みますが、敵からの銃弾は水面をかすめて飛びます。ようやく渡り終えたら夜明けになり、敵が待ち伏せをしていてやられる、多くの隊員が戦死傷しました。

その間戦史では、「和爾部隊は主力をもって長生橋方面から攻撃を開始して外郭陣地の第一線を奪取し、引き続き二十五日昼間第二線陣地を攻撃したが、敵の抵抗が頑強で成功せず、同夜夜襲によりようやく第

二、第三陣地線を突破し、城壁に達した」とあります。葛野第三大隊長らが壮烈な戦死を遂げました。

「同大隊一般中隊の将校はこれまでに戦死または戦傷し」とあるので、常德城占領には大変な犠牲があったことが証明されています。そして、連隊本部が入城したのは、敵降伏後の十二月三日であるということでした。

私の記憶でも、常德の街は城壁で囲まれていて防御力は強く、敵が配備されているため攻略に手間取りました。渡河の時は先にも申したとおり、銃を頭の上に入れて渡り、その間に弾薬手も弾薬箱も持ったままやられました。敵の射撃中の渡河ですから、工兵もいないし、架橋もしていません。

行軍途中でも、橋は落とされ、公路は鋸の歯同様に切り取られているため、日本軍は山の上に手作業で道を作りました。工兵隊も自動車隊も、山の上を道を通って城内に入りました。この戦闘では、我々機関銃隊もだいたいぶやられ、同年兵も死んだり負傷をしました。城内

には二、三日いて、城壁を西の方に出て逃走する敵を追跡し、部隊は戦果を挙げました。我々は工兵隊の作った山路を、重機関銃を駄載し、元の駐屯地の帰り、相変わらず、討伐では民家に寝て行軍と戦闘を続けていました。

中国は、日本では考えられぬほど広大です。山また山です。数カ月の間行軍したり、駐屯したり、戦闘したりして、蒋介石軍を追って進軍をしました。第一線部隊は後方より弾薬の補給を受けましたが、食糧の補給は全然無く、戦闘より食糧の無いのに弱りました。やむなく無人の農家より米を盗み、敵に見付からぬようにクリークの水で米を洗い、外に明かりがもれぬようにして飯盒で飯を炊いて食べました。翌朝、クリークを見ると、人や馬の死骸にウジがたかつて浮いていました。稲穂から籾を取ってきたこともありましたが、次に衡陽戦について話をします。

我が歩兵第一二〇連隊和爾部隊にとって、衡陽攻略戦は大きな損害を出しました。すなわち、和爾連隊長

が山と山とに囲まれた部落を進軍中に、待ち伏せていた中国軍が雨霞の如く撃ってくる銃砲火のために戦死されたこと、将校はほとんど戦死・戦傷し、下士官が代わって指揮を執る状況で、千二百人の隊員のほとんどを失ったことです。

また、第一次衡陽攻撃発起から、第二次、第三次、陥落開城まで、実に長い日時が経ちました。六月二十一日に易俗河付近から行動を開始し、我が連隊正面に中国軍が白旗を掲げて停戦を申し入れ、第十軍長先覚中將が投降したのは八月八日であったといえますから、ずいぶん長い期間の戦闘でした。

我々の部隊が衡陽の街へ突入した時は、まだ街の中では商店が商売をしていて、彼らは日本軍が街中に入ってから来たのを知らなかつたのかもしれない。敵は山にずいぶん居て、なかなか陥ちず陣地を攻略するのに骨を折りました。街中には散兵壕が掘ってあり、我々重機関銃隊は山の前線に居て夜襲に備えています。

私は衡陽の手前で負傷しました。田の畔で右の首の

右側に弾丸がかすって、もう少して喉をやられるか頸動脈をやられるところでした。自分は夢中で判りませんでしたが、後の戦友が背中に血が流れていることを知らせてくれて、ようやく「やられた」と分かったのです。

しかし、戦闘中、前線ですから治療をしてもらうことも出来ず赤チンキを塗ってもらいましたが、暑い夏のこと、傷口へ蠅がたかり、やがて蛆がわき、糞を付けると蛆が背中の中へ入り、気持ちの悪い日々を過ごしました。野戦病院へも入れず、傷が治癒せず、病院に入ったのは相当後でした。

行軍中は疲れているので、休憩の時や、夜などは、バタンと倒れて休みました。雨の中でも眠りました。機関銃隊は馬を持っているので、夜、知らぬうちに行軍中の部隊の兵に馬を盗まれることがあり、御兵は油断してはられませんでした。他の中隊では中隊長の乗馬を持って行かれたので騒ぎになっていました。

衡陽はようやく陥落させることが出来ましたが、敵

の狙撃兵は上手で、指揮官が狙われずいぶん戦死・傷をし、下士官が小隊長をやったりしている中隊もかなりありました。

私は負傷のためようやく野戦病院に入ったのですが、食べる物も無く、炊事の煙が上がると敵襲があるので、非戦闘員の多い病院は要注意でした。入院患者は補充の兵隊が多く、戦傷より戦病の患者が多く、栄養失調、下痢、マラリア等を併発し、水や食事も衛生的でなく、病菌により感染するのです。死亡患者は腕や指を切って焼き、それを封筒に入れ氏名を記入して保管していました。

病室といっても、土間にむしろを敷いて寝かせていました。水も汚れているものを飲みました。排便に蠅がたかり、その蠅が食物にたかるのですから、当然感染するのです。従って赤痢患者が出れば、皆が赤痢患者となってしまう。食器の煮沸もなかなか困難、軍医も衛生兵も手が足りませんでした。

行軍が続ぎ、作戦が長くなれば、風呂へは一カ月も二カ月も入りませんから、蚤や虱に食われ、鬚は伸び

放題、垢だらけ、どこの誰やら分からぬ有様でした。

そして、疲れ果てて喋べる元気もなく、ただ黙々と行軍しました。途中「小休止」になると、兵隊は皆枯木のように草の上に倒れ、しばらくの間休息をとりました。雨の日は、民家の無い所では、雨具は無いし、雨に打たれてひたすら故郷のことを思いながら、いつしか、うとうとと眠る。まさにこの世の地獄です。

中国軍はわらじを履いており、鍋や釜を背負い、笠をかぶっていました。庸兵ですから射撃もうまく、先に申したように指揮官が死傷しています。小銃はドイツ製で、水に漬かっても錆びません。戦争の終わり頃は自動小銃でした。一方、日本は明治時代からの三八銃であり、雨にあえば赤錆でした。

中国軍には以前飛行機が少なかったのですが、米軍（在支米軍）の戦闘機がよく飛んできてはやられました。また、広い公路は車が通れぬよう切断してあり、このため日本軍は山側に道を造りましたが、山には石が無く赤土で、雨が降ると泥濘化してしまいました。

昭和二十年になり芷江作戦（湘西作戦）があり、地的の芷江の米軍航空基地を占領することが出来ず、米装備された中国軍に敗れて撤退して宝慶へ戻り、戦備を固めていました。その戦では落下傘爆弾での被害も多く、戦備や装備も米式化された蔣介石軍は強力になっていました。また、米軍機の機銃掃射による負傷者の弾の入った所は傷は小さいが、出た所は肉がむしり取られ、出血多量で死ぬ者が多くなりました。

昭和二十年八月、終戦を知らされ、軍装のまま何カ月もかかって上海に到着、米軍に兵器を没収されました。途端に中国人が威張り出し、それまで借りていた家の板の間にも上げてもらえず、土間に干し草を敷いて寝ました。

米は支給されましたが半分以上を中国人に取られ、少量の米に畑の草などを入れて雑炊を作って食べたり、中国人の日雇いとなり食糧をもらって、蛇や蛙も食べました。中国は戦争が終わってから、蔣介石軍と共産党の八路軍や新四軍に分かれて戦が始まったので「中国の兵隊になりたい者は残れ、食糧も与えるし妻

もあてがう」と言われ、一、二人残る者もいました。

内陸の中国人は海を知らないから、洞庭湖を海だと思ひ、「お前達は悪くない。日本の大人（タイジン）が悪い。舟を貸すからこれで帰れ」とも言われました。

我々は昭和二十一年七月、上海から船に乗り、佐世保へ上陸し、懐かしい故郷に帰りました。